



Title	イメージ心理学に携わって：その来し方と行く先
Author(s)	八田, 武志
Citation	若手イメージ研究者のためのブラッシュアップセミナー（Brush up seminar for young researchers on mental imagery）. 2013年3月16日（土）～17日（日）. 北海道大学学術交流会館, 札幌市., 15-15
Issue Date	2013-03-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52524
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	proceedings
File Information	hatta.pdf



[Instructions for use](#)

イメージ心理学に携わって：その来し方と行く先

八田武志（関西福祉科学大学）

概要

ブントにより哲学からの脱皮を成し遂げ、独立の科学に仕上げられた心理学はその後、ゲシュタルト心理学や人間性心理学を派生させながらも実験心理学がその主流を堅持した。これは、自然科学的指向、とりわけ物理学の影響を内包したためと考えられる。Watson, J. B. の「心理学は意識へのあらゆる言及を放棄しなければならない」とする1913年の行動主義宣言の軛から逃れる選択を行い、実験心理学は1960年頃から始まったとされるいわゆる認知革命により主観的意識であるとして排除されてきたイメージが研究の遡上にのぼることとなった。認知革命は20世紀初頭のガリレオ・ニュートン流の宇宙観を放棄し「完全な客観的観察」から「客観的な知識は最終的には主観的である」ことを受容する時代精神の影響を受けたものである。

このような過程でイメージを実験心理学的に研究した先駆者には、Paivio, A., Biederman, I., Cooper, L. A., Corballis, M. C., Farah, M. J., Koenig, O., Sergent, J., Shepard, R. N.らの名前を挙げるができる。なかでもイメージ実験心理学の里程標をKosslyn, S. M.の【Image & Brain, MIT, 1996】に見ることができる。それらは1960-80年代の話で、イメージを実験的に取り上げることに強い影響を与えたのは情報処理機構として人間をみなす通信工学の発想であり、反応時間を指標とする実験研究が可能となった。また、その頃実験心理学の研究者に大きな関心と影響を与えたのはSperry, R. W.の離断脳研究であり、ラテラルティと呼ばれる研究分野が形成されることとなった。多くのラテラルティ研究者は健常成人の左右脳の機能差の検出に取り組むこととなった。筆者もその一人であり、このような歴史的変遷を実体験したことを踏まえて、自分自身が実施したいいくつかの実験研究を紹介することを前半の目的とし、イメージを題材とする実験手続きの具体的な紹介を行う。

後半の目的としては今後のイメージ研究はどのような方向に向かうべきなのか、妄想がらみの想いを述べたい。それらを列挙すると、1) 包括的システムとしてのイメージ機能と脳との関わり方についてであり、医学系でない方法論を堅持する（脳画像、免疫系、自律神経系指標に身を委ねない）ことの重要性、2) 運動系を考慮するイメージ関連のテーマ（それらは辺縁系を中心とした研究および基底核系を含む研究）への取り組み、3) 人間に固有の高次機能への幅広い取り組み、たとえば美的感覚（音楽や絵画）、臨床心理学が対象としている人間関係のとらえ方、倫理的モニタリング欠陥、などの推奨が考えられるよう。